

カティンの森事件の遺族に対するインタビュー調査結果

岡 野 詩 子

1. インタビューの目的・手法
2. インタビュー結果
3. インタビューの全内容

1. インタビューの目的・手法

これは、2009年5～8月に、カティンの森事件¹によって父親もしくは夫を失った遺族に対して行ったインタビュー調査のテープ起こしによって、内容を整理し、日本語に翻訳した資料である。このインタビューの目的は、事件の遺族らが事件以降どのような人生を送り何を考えてきたかを明らかにすることにより、カティンの森事件の真相とは別に、時代の局面でカティンの森事件がどのように扱われてきたかを明らかにすることである。すなわち、歴史的空白となった第二次世界大戦の悲劇的事件であるカティンの森事件が、戦後の冷戦体制下で、また冷戦体制崩壊後の世界の中でどのように政治利用されてきたかを、遺族の個人的体験をたどることによって浮かび上がらせたい。なお、このインタビュー内容の分析は、別稿「カティンの森事件の遺族に対するインタビュー調査」(学術誌に投稿予定)で行った。ここでは、資料的価値の高いインタビューの内容を、そのまま掲載した。

ポーランド人でもロシア人でもなく日本人という第三者的な立場からインタビューを試みることは、彼らの話を客観的に捉える点で重要だと思われる。加えて、インタビュアーと利害関係が生じず遺族が安心して語ってくれるというメリットもある。遺族の高齢化が進むと、世代的の問題関心にも隔たりが生じてしまうだろう。現在、遺族会で活動している子ども世代は主に70歳代から80歳代の人々である。あと10年20年もたてば、彼らの生の戦争経験の証言を得ることは難しい。本インタビューの実施と分析によって得られるであろう成果は、第三者の視点から彼らの歴史認識、および社会意識の変化を政治的な利害関係がなく捉えることができること、そして現在でも政治的に利用されるこの事件を、国家レベルだけではなく国民レベルの視点から歴史観を分析することができることである。

インタビューの方法は次の通りである。インタビューの対象者は、ポーランド南部クラクフ・カティン遺族会 (Stowarzyszenie Rodzin Ofiar Katynia Polski Południowej w Krakowie)²に属する人々とする。

¹ カティンの森事件とは、第二次世界大戦中の1940年に約22000人のポーランド人将校、警官、知識層等が、カティン、ミエドノイエ、ハルキフなど5ヶ所でソ連のNKVD (内務人民委員部) によって殺害された事件。

² 1989年11月設立。会員677人 (2005年12月31日現在)。主な活動：墓地開設 (政府系機関「闘争殉教地保護評議会 (Rada Ochrony Pamięci Walk i Męczeństwa)」による支援の下)、展示会の開催、資料収集等。

る。方法は、聞き手が質問をあらかじめ用意し、対象者にはそれに対して自由に答えてもらう。対象者ごとに質問を変えるのではなく、同一条件で行った。また、事前に遺族会へインタビューの告知、質問表を見せ、承諾してくれた人に対して個別に予定を相談した。注意点として、回答が曖昧になる可能性が否定できない。年代や事柄の回答に対しては、他の諸資料をつき合わせて検証していく必要がある。それでも、本インタビューによって、対象者の話をできるだけ忠実に書き残し、歴史史料として残したい。言語の面においては、ポーランド語と日本語との表現の違いによって誤訳が起きないように、これに関してもなるべくポーランド語の表現に沿った邦訳を進めた。インタビュー後、まずはポーランド語の音声記録を起こした³。そして、その原稿を対象者へ送付し、修正、付け加え等をしてもらい、そして論文への実名による個人情報の利用および公表の承諾を得た。

質問項目

1. 氏名、生年月日、出生地。
2. 父親／夫の名前、階級、どこで殺害されたか。
3. 最後に父親／夫を見たのはいつか。
4. 父親／夫と通信が途絶えたのはいつか。
5. いつ、どのようにして殺害されたのを知ったか。
6. 戦中どこに住んでいたか。そして父親／夫の連行によって、家族への抑圧があったか（危機にさらされたか）。
7. 共産主義時代の間、調査を試みたか。それに対する政府の圧力があったか。
8. 1989年の体制転換後、真相究明に向けて状況がどのように変化したか。自ら何か行動を起こしたか。
9. 遺族会の活動。
10. カティン事件に関して現在の抱える問題。
11. ポーランド、ロシアに対する率直な気持ち。

2. インタビュー対象者に関する情報

質問1、2：氏名、生年月日、出生地。父親／夫の名前、階級、どこで殺害されたか。

・実施期間：2009年5月20日から2009年8月4日まで。

・場所：各対象者の自宅、もしくはポーランド南部クラクフ・カティン遺族会事務所（住所：ul. Rzeźnicza 2a, 31-540, Kraków, Polska）

・人数：13人（男性1人、女性12人）

³ テープ起こしは、ポーランド南部クラクフ・カティン遺族会のメンバーでもあるマウゴジャータ・ソプチンスカ・メンケさん（孫世代 Małgorzata Sopczyńska-Menke）に手助けをしてもらった。この場を借りて謝意を表したい。

- ・年齢層：70代から90代
- ・子ども世代12人、妻世代1人
- ・クラクフ在住者12人、ワルシャワ在住者1人（ワルシャワの遺族会に所属）
- ・埋葬場所による対象者の内訳
 - ーカティン（Katyń）：3人
 - ーハルキフ（Charków）：5人
 - ーミエドノイエ（Miednoje）：3人
 - ービコブニア（Bykownia）⁴：1人
 - ーコジェルスク収容所から生還：1人

対象者の詳細（敬略称）

[1] カティン（Katyń）

①マリア・シェミンスカ・パペシュ（Maria Siemińska-Paperz）

1932年2月11日生、モドリン（Modlin）、戦争勃発当時（1939年時点）7歳、
父親：ルドヴィク・ナポレオン・シェミンスキ（Ludwik Napoleon Siemiński）
1897年1月31日生、クラクフ（Kraków）、殺害当時43歳、職業：軍人（少佐）

②マリア・パブウォフスカ（Maria Pawłowska）

1930年4月10日生、スタニスワフ（Stanisławów）、戦争勃発当時9歳、
父親：ヤン・ザレスキ（Jan Zaleski）
1902年1月18生まれ、ザルジェ（Zarudzie）、殺害当時38歳、職業：裁判官（陸軍中佐・予備軍）

③マグダレナ・ブゾフスカ（Magdalena Bzowska）

1939年7月16日生、クラクフ（Kraków）、戦争勃発当時1.5ヶ月、
父親：イエジ・ブゾフスキ（Jerzy Bzowski）
1903年7月4日生、カリシュ（Kalisz）、殺害当時37歳、職業：鉄道員（陸軍中佐・予備軍）

[2] ミエドノイエ（Miednoje）

④ヴワジスワヴァ・クシャノフスカ（最初の夫の名字）、ルシン（2番目の夫の名字）

（Władysława Krzanowska[最初の夫の名字]、Rusin[2番目の夫の名字]）

⁴ カティン、ミエドノイエ、ハルキフに続き、新たに発見された埋葬場所。発掘はされているがまだ墓地は建設されていない。ビコブニア（Bykownia）はウクライナ・キエフ近郊に位置する。

1913年8月1日生、シフィエジョバ (Świerzowa)、戦争勃発当時26歳

夫：ユゼフ・クシャノフスキ (Józef Krzanowski)

1909年3月1日生、サンボル (Sambor)、殺害当時30歳、職業：技師（一般民の犠牲者）

⑤ミハリナ・ビアウエツカ (Michalina Białecka)

1925年9月9日生、スウコピツェ (Sułkowice)、戦争勃発当時14歳

父親：ミハウ・ヴワジスワフ・カニク (Michał Władysław Kanik)

1895年8月16日生、リバジヨビツェ (Rybarzowice)、殺害当時45歳、職業：警官

⑥ヤドヴィガ・グジブ (Jadwiga Grzyb)

1926年1月6日生、パルチンツェ (Palczyńce)、戦争勃発当時13歳

父親：ヤクブ・クリマ (Jakub Klima)

1893年7月7日生、ザグジェ (Zagórze)、殺害当時47歳、職業：警官（警察署長）

※1940年4月10日に、カティン関係の家族ということでNKVD（ソ連内務人民委員部）に逮捕され、
4月13日には北カザフスタンへ移送された。

[3] ハルキフ (Charków)

①ズビグニエフ・シェカンスキ (Zbigniew Siekański)

※ポーランド南部クラクフ・カティン遺族会代表

1937年9月7日生、ビドリリン (Bydlin)、戦争勃発当時2歳

父親：ロマン・シェカンスキ (Roman Siekański)

1907年2月6日生、キエルツェ (Kielce)、殺害当時33歳、職業：教師、校長（陸軍中佐・予備軍）

②ダヌータ・ベウトフスカ (Danuta Bełtowska)

1927年11月16日生、スバウキ (Suwałki)、戦争勃発当時13歳

父親：レオン・ヤン・パンチャキエヴィッチ (Leon Jan Panczakiewicz)

1897年5月16日生、ノビィタルグ (Nowy Targ)、殺害当時43歳、職業：将校、騎兵隊少佐

③ヤニーナ・ソリンスカ (Janina Solińska)

1932年6月13日生、クラクフ (Kraków)、戦争勃発当時7歳

父親：アレクサンドル・フェリックス・コラレフスキ (Aleksander Feliks Koralewski)

1897年11月20日生、ワルシャワ (Warszawa)、殺害当時43歳、職業：陸軍大佐

④ハンナ・マルスカ (Hanna Marska)

1939年8月23日生、ワルシャワ (Warszawa)、戦争勃発当時生後1週間

父親：ボフダン・ザクシェフスキ (Bohdan Zakrzewski)

1912年6月22日生、トゥワ：ロシア (Tuła)、殺害当時27歳、職業：鉄道員、学生 (陸軍中佐・予備軍)

⑤ヤニーナ・ポッドグルチク (Janina Podgórczyk)

1929年9月1日生、プシェミシル (Przemyśl)、戦争勃発当時10歳

父親：シモン・スコチラス (Szymon Skoczył)

1894年10月27日生、ヴァドビツェ (Wadowice)、殺害当時46歳、職業：陸軍中佐

[4] ビコブニア (Bykownia)

①ゾフィア・チェシエルスカ (Zofia Ciesielska)

1931年2月11日生、ドロホビッチ (Drohobycz)、戦争勃発当時8歳

父親：ヤン・フリドレヴィッチ (Jan Frydlewicz)

1890年3月24日生、スターリーサンボル (Stary Sambor)、殺害当時年齢不明、職業：法律家 (陸軍中佐・予備軍)

※1940年4月10日に、カティン関係の家族ということでNKVDに逮捕され、4月13日には北カザフスタンへ移送された。

[5] コジェルスク収容所から生還

①ベルナデタ・シェグロフスカ (Bernadeta Szegłowska)

1934年5月16日生、ヴィリニウス (Wilno)、戦争勃発当時5歳

父親：スタニスワフ・シフィアニエビッチ (Stanisław Swianiewicz)

1899年10月26日生、ダウガピルス：ラトビア (Dyneburg)、1940年当時41歳、職業：ヴィリニウスのステファン・バトリー大学教授 (法律家、経済学者)。

※1939年9月、ソ連軍の捕虜となり、コジェルスク収容所に送られた。1940年4月、仲間たちがカティン近くのグニェズドヴォ駅で列車を降り、車で移送されていく中で、彼だけが列車に留められ処刑を免れた。彼の研究の専門がドイツとの関係においてソ連にとって役に立つとみなされ、生き残ることができたと考えられている。戦後ロンドンに留まり、その後インドネシア、アメリカ、カナダで教鞭を取る。

3. インタビューの全内容

質問3：最後に父親／夫を見たのはいつか。

・カティン

パベシュさん：戦争が始まる1ヶ月前に父親は徴兵され、家族と別れることになった。戦争勃発後、父親側のおじのいるクラクフへ移る。当時、自分は7歳、弟は5歳だった。

パプウォフスカさん：1939年8月27日に父親と別れる。父親は徴兵された。

ブゾフスカさん：戦争が勃発した時は、まだ1.5ヶ月だったから何も覚えていない。

・ミエドノイエ

クシャノフスカさん：1939年8月の終わり。

ビアウヅカさん：最後に父親と会ったのは1939年9月9日、ザモシチ近くのヤヌフ（Janów）で。ドイツ軍の空襲から東へ逃げていた時で、その時に父親はこれ以上遠くに行かず引き返すように家族に言った。

グジブさん：1939年9月17日の朝、父親は警察署長として部下と一緒に逮捕された。

・ハルキフ

シェカンスキさん：1939年当時2歳だったので覚えていない。

ベウトフスカさん：1939年9月3日から6日の間に父親は戦争へ行った。

ソリンスカさん：1939年9月1日か2日に父親と別れ、その後疎開した。

マルスカさん：生まれてまだ2週間程だったので何も覚えていない。

ポッドグルチクさん：父親は命令を受け、ボフニアから早めに旅立って行った。自分と母と妹もボフニアを去る。9月4日にトマショフ・ルベルスキで、父親が軍隊で移動するところを見かけた。自分たちもドイツの空襲から逃げる。9月10日に父親はトマショフ近くの森の中にいた家族のところへ来て、そこで父親と別れを交わし、伝令が来たので父親は命令に従いバイクで去って行った。自分たちは、父親の同僚の将校と一緒に逃げ続けた。9月17日の時点で東からソ連が攻めてきたので、また来た道を戻らなければならなかった。父親はルヴフ近郊でソ連軍の捕虜になっていた。

・ビコブニア

チェシエルスカさん：1940年4月10日/11日の夜中にNKVDによって逮捕された。2日後の4月13日には家族も逮捕され、母、兄、姉、自分もNKVDによって移送された。

・コジェルスク収容所から生還

シェグロフスカさん：1939年8月28日か29日。父親が軍隊に行く時に別れを交わした。

質問4：父親／夫と通信が途絶えたのはいつか。

・カティン

パベシュさん：1939年11月にコジェルスク収容所からおじ宛に手紙が届く。家族はクラクフにいるおじの家に身を寄せていると思ったからである。手紙の中には妻や子供たちのことも書かれていた。当時、収容所にいた将校は一人一通だけ、検閲付きで手紙を書くことが許されていた。母親が返事を書く。

パプウォフスカさん：1940年2月17日にコジェルスク収容所から手紙が届く。

ブズフスカさん：1939年12月頃、コジェルスク収容所から手紙が届いた。母親は返事を書いたが宛先不明で戻ってきた。

・ミエドノイエ

クシャノフスカさん：1940年2月頃にロシアのカードを受け取る。唯一の手紙。

ピアウエツカさん：唯一の手紙は、1939年12月1日に投函され、ロシア語で住所が書かれており、父親はオスタシュコフの収容所にいることが分かった。家族がその手紙を受け取ったのは1940年1月20日。家族への心配も書かれていた。

グジブさん：1939年11月か12月。オスタシュコフ収容所からの唯一の便りには、家族への心配の他に、暖かい服、にんにく（健康のため）、50ルーブルを送って欲しいと書かれていた。

・ハルキフ

シェカンスキさん：父親は3通の手紙を出していた。それらはスタロビエルスク収容所からで、そこにいるということがわかった。

ベウトフスカさん：1940年3月21日に一度だけ電報が届いた。手紙の内容は「自分は健康で大丈夫だ。」と書かれていた（皆同じように書かされていた）。

ソリンスカさん：1940年3月22日の手紙が最後の父親の知らせだった。その前は、1939年11月29日、12月24日、1940年2月8日に届いている。

マルスカさん：1940年にスタロビエルスク収容所から手紙が届く。

ボッドグルチクさん：1940年3月17日にスタロビエルスク収容所から電報が届く。父親とその友人のサインがあった。電報はドイツ語で書かれており、友人宅に届けられていた。母親は4月30日に返事を出したが宛先不明で戻ってきた。

・ビコブニア

チェシエルスカさん：父親からの便りは全くない。父親の消息を知ったのは1991年になって初めて。1940年4月13日の夜に5人のNKVDの役人が来て、手に持てるだけの荷物を用意しろと言われた。

・コジェルスク収容所から生還

シェグロフスカさん：コジェルスク収容所からの手紙はないと言っている。他の書類等はあるのにコジェルスク収容所からの手紙だけはない。6つ年上の姉はただ覚えていないだけと言っている（当時本人は6歳）。母親は夫がコジェルスク収容所にいるということを知っていた。ヴィリニウスからはたくさんの人が逮捕され収容所に送られた。当時、ヴィリニウス宛に届いた手紙は、街が届け先を探し出して配達していた。これにより、送り主の名前を見て、父親からであり、コジェルスク収容所にいることが分かった。父親は誰か知り合いに手紙を送ったと思われる。おそらく、母親は子どもの安全のために手紙を隠したのではないかと思う（子どもは何も知らずにコジェルスクという名を口にしてしまう恐れがあったからだと考えられる）。

質問5：いつ、どのようにして殺害されたのを知ったか。

・カティン

パベシュさん：1943年4月、ドイツ当局によって発刊されたポーランド人向けの新聞に父親の名前が載っていた。

パブウォフスカさん：1943年6月、ドイツが発行したルヴフでの新聞に父親の名前が載っていた。

ブゾフスカさん：新聞の犠牲者リストに名前はなかった。1991年になって初めて知った（※1943年4月13日のドイツによる事件の発表はカティンのみ）。

・ミエドノイエ

クシャノフスカさん：1943年のカティンの公表の際に、自分の夫もカティンで死んだと予測した。確証を得ることはできなかった。

ビアウツカさん：1943年のカティンの公表で父はもう生きていないと悟った。毎日ゴルリツェの中央広場でカティンの犠牲者の名前を読み上げる放送を聞きに行った。1990年になってからオスタシュコフ収容所の犠牲者リストで父の名前を見つけ、初めて消息を知った。

グジブさん：1940年4月13日に北カザフスタンへ移送される（1946年の5月か6月に帰国）。そこで母は、オスタシュコフ収容所の父宛に手紙を出す。宛先不明で返ってくる。兄がアンデルス將軍の軍に入り、テヘラン、パレスチナから兄は「ポーランド政府は消息不明の将校たちを捜索している」という手紙を出す。しかし、家族の元へは届くことはなかった。1946年になってやっと、ロンドンにいた兄は家族を探し当てた。兄によると、父の消息の情報は何もなかった。しかし、イギリスでは3つの収容所にいた捕虜たちに関する議論があったという兄からの知らせにて、父はもう生きていないと予測した。

・ハルキフ

シェカンスキさん：1943年のカティンの発表の際、父はもう生きていないと予測した。正式に知ったのは1990年。

ベウトフスカさん：カティンはスタロビエルスク収容所から離れていたの、生存の可能性を信じていた。1990年まで確かな情報が何もなく、家族はずっと父を探し続けた。

ソリンスカさん：1943年の時点で、もう父は生きていないと予測した。正式に知ったのは1990年。

マルスカさん：1991年になって初めて父親の消息を知った。

ポッドグルチクさん：1943年の時点で、家族は父が生きていると思った。なぜなら、ドイツが公表した犠牲者リストに父親の名前がなかったから。しかし、長い間父親からの連絡はなく、徐々に望みは薄れていった。正式に消息を知ったのは1991年である。

・ビコブニア

チェシエルスカさん：1994年になって初めて、ウクライナでのポーランド人犠牲者リストにて父親の名前を見つけた。

・コジェルスク収容所から生還

質問5：どのようにして父が生きていることを知ったか。

シュエグロフスカさん：1941年4月にソ連の収容所より知らせが届く。(Ust-Wymskich łagrów republika Komi w ZSRR：ロシア連邦中北部にあるコミ共和国の収容所) 1943年にテヘランの国際赤十字から小包が届き、父親が西側の国にいることを知る。

質問6：戦中どこに住んでいたか。そして父親の連行によって、家族への抑圧があったか（危機にさらされたか）。

・カティン

パベシュさん：クラクフ。子どもだったため特に恐怖を感じることはなかった。クラクフは当時ドイツの支配下だったため、ソ連に対してではなくドイツに怖さを感じていた。戦争中、地下組織の中での中学校に通った。

パブウォフスカさん：ズウォチュフ。1940年6月にはソ連軍による逮捕、シベリア移送を避けるためにボリスワフ (Borysław) へ移った。そこもソ連支配下であり、抑圧を恐れ、不法滞在ながらひっそりと暮らしていた。1941年6月の独ソ戦勃発によりボリスワフはドイツの支配下に入った。家族が一番恐れていたのはソ連当局による逮捕だった。なぜならカティン関係の家族は1940年2月頃からシベリアへ移送されているのを知っていたから。

ブゾフスカさん：クラクフ。ドイツに対して恐れを抱いていた。カティンに関しては特に何も話されていなかった。

・ミエドノイエ

クシャノフスカさん：ジェショフ。夫が捕虜となってから帰ってこないことに不安を感じた。ドイツに恐れを抱いていた。

ビアウエツカさん：ゴルリッツェ。ドイツの抑圧を恐れていた。戦時中、二度ドイツ当局によって逮捕されたが、当時の恩師の機転により強制労働収容所への移送は免れた。

ゲジブさん：カザフスタン。もうすでにカザフスタンに移送されたという恐怖を味わった。

・ハルキフ

シェカンスキさん：クラクフ。ドイツを恐れていたのと同時に、NKVDによってシベリアやカザフスタンに送られることにも恐怖を感じていた。

ベウトフスカさん：ワルシャワ。1941年からノヴィタルグ。静かで安定した生活を送るために、ワルシャワから父親の家族のいるノヴィタルグへ移った。もしそのままワルシャワに残っていたら、兄をワルシャワ蜂起で失っていたかもしれない。

ソリンスカさん：1939年ボフニア。1943年からソクウカ（Sokółka：ピアウイストック近く）。1948年からワルシャワ。父親の情報が全くなかったので、特に恐れはなかった。最初は父親が捕虜になっているとは知らなかった。1943年まで父親の身に何が起きたのか分からなかった。1943年にはもう父は戻ってこないと思った。戦争中、占領、食料不足に不安だった。

マルスカさん：母親はワルシャワ。子どもたちは祖父のいるクラクフ・プワショフ地区に住んでいた。ドイツに対して恐怖を感じていた。

ポッドグルチクさん：ボフニア。まだ子どもだったためドイツ占領における恐怖はなかった。父親についても大丈夫だと思っていた。なぜなら捕虜は丁重に扱われると思っていたから。

・ビコブニア

チェシエルスカさん：戦争勃発当時はルヴフ。1940年に家族はドゥロホビツチュ（Drohobycz）へ移った。家族は北カザフスタン（Kustanajski obwód）移送されたことによって、死の恐怖を感じた。NKVDの役人に「もうポーランドには帰れない。ポーランドは消滅した。お前たちはここで死ぬのだ。」と言われた。家族は、6年後の1946年5月に帰国できた。兄はアンデルスの軍に入るがモンテカジーノで戦死した。

・コジェルスク収容所から生還

シェグロフスカさん：ヴィリニウス。ソ連軍の侵攻により、NKVDによって逮捕されないように9月19日からヴィリニウスの中で住所を変えた。

質問7：共産主義時代の間、調査を試みたか。それに対する政府の圧力があったか。

・カティン

パベシユさん：死亡証明書の変更を願い出た（1945年5月9日に戦争で死んだとされていた）。生活費も求めた。結果は変わらず。1988年から個人的に行動できるようになり、再度、証明書に「1940年4月30日死亡」との記載を求めた。沈黙を保つことが身の安全には不可欠だった。仕事場では、自分の父親がカティンで亡くなったことを知られていたが、幸い誰も外部に漏らさなかったおかげで安全だった。公共の場以外では話されていた。公安局（UB:Urząd Bezpieczeństwa）は、反共産主義的な活動をしていないか絶えず見張っていた。2人のいところはUBによって一時拘束されていたことがある。

パブウォフスカさん：父親について隠さなければならなかった。沈黙を保った。母親は仕事を失うことを恐れた。娘は大学に行くことができなかった。

ブゾフスカさん：国際赤十字に捜索を依頼。結果は得られず。正式な死亡証明書を受け取っていたので、（カティンで殺害されたとは思っていなかった）特に行動を起こしていない。カティンについて、内輪では話されていたが深く理解していなかった。抑圧も特になかった。

・ミエドノイエ

クシャノフスカさん：ポーランド赤十字に調査依頼。沈黙を保てば、安全だった。

息子のヘンリク・クシャノフスキさんは、アメリカの政治学・国際関係学者であるヤヌシュ・K・ザボドニー（Janusz K. Zawodny）の文献⁵を地下出版で読む機会があった。

ピアウエツカさん：1945年以降に家族は独自で調査し始めた。国際赤十字に依頼したが結果は得られず。1947年4月24日にモスクワのポーランド大使館へも願い出たところ、1947年7月16日に大使館より「ミハウ・カニクは解放され引き揚げた」という答えが返ってきた。これによって、家族は父が生きていると信じた。共産主義時代はカティンについて話せなかった。クラクフのヤギェウオ大学に入り、そこに教授たちにカティンについて話すべきでないとと言われる。理解のある教授に恵まれた。

グジブさん：何か行動を起こすことが怖かった。父がカティン事件で、そして自分がカザフスタンにいたことは決して口外しなかった。沈黙を保てば、何も抑圧はなかった。1957年に母が兄のいるイギ

⁵ Zawodny, Janusz K. (ザヴォドニー, ヤヌシュ・K) [1962]. *Death in the Forest: The Story of the Katyn Forest Massacre* (『カティンの森の夜と霧：第二次世界大戦をめぐる大量虐殺事件の真相記録』). Indiana: Notre Dame University Press. (初版)

リスへ行き、そこでカティンの詳細や、他の2つの収容所についても詳しく知った。

・ハルキフ

シェカンスキさん：絶えず父を探す努力をしていたが、事実を明らかにすることは難しく、共産主義下では何も言わなければ何も抑圧はなかった。沈黙が生きていくための最善の方法だった。学校、職場では密告を恐れ一切口にしなかった。

ベウトフスカさん：ポーランド赤十字、モスクワ、スイスへも文書を送ったが何も確かな答えは得られず。返事には「そのような人物はソ連にはいない」と書かれていた。カティンについて何も話さないことが安全だと分かっていた。父親のことを聞かれたら、戦争で死んだとだけ言っていた。

ソリンスカさん：ソ連の赤十字に文書を送った。返事には「そのような人物はソ連にはいない」と書かれていた。母親は1年半の間仕事を得ることができなかった。本人と姉は大学教育を受けることができなかった。ワルシャワのような大都市に住んでいたから。全て、父親の関係だと悟った。

マルスカさん：学校で歴史を教えていたが、生徒にカティンの事実を言うことができなかった。特に危険にさらされることはなかった。

ポッドグルチクさん：1943年、1957年、1959年に国際赤十字に文書を出す。返事には「そのような人物はソ連にはいない」と書かれていた。本人と妹は大学教育を受けることができなかった。しかし、本人はシロンスク地方で高等教育を受けることができた。母親は父親がスタロビエルク収容所の捕虜だと認めていなかったのも、そのおかげで未亡人としてのお金をもらうことができた。沈黙が安全につながると分かっていた。

・ビコブニア

チェシュルスカさん：家族は何もできなかった。カザフスタンへ送られたが、奇跡的に生き残ることができたから。またシベリアへ移送されるのではないかといつも恐怖を抱いていた。家族は共産主義時代には階級の敵とされ、そのため姉は大学教育を受けることが難しかった。日々の生活も厳しく、いつも公安局に見張られていた。自分は周りの人の助けを借りて大学で勉強することができた。カティン事件について何も話すことができなかった。1994年まで、父親がそれに関わっていたとは知らなかった。母親は、家の外でシベリアにいたことを話さぬよう注意した。母親は赤十字に搜索を願い出たが結果は得られなかった。

・コジェルスク収容所から生還

シェグロフスカさん：抑圧された理由として、父親は戦後イギリスに留まっていたこと、母親がカトリックに信仰深かったのも、共産党には入らなかったことが挙げられる。姉は自分のキャリアとは関係ない仕事に就かされた。自分自身も共産党関係には関わらなかった。高校卒業試験の現代社会の科

目で一番低い成績を取らされた（他の成績はほとんど高かったのにかわらず）。家の中では、いつも反共産主義的な雰囲気が漂っていた。1957年になって、母親はパスポートを得て、父親の所へ行くことができた。共産主義時代はいつも秘密警察（SB: Służba Bezpieczeństwa）に見張られていた（父親がイギリスにいたため、スパイかどうか監視されていた）。母親の心配事は、父親がカティンから生き残り、イギリスでは名の知れた研究者であったことから、SBから何かしらの抑圧を受けるのではないかということだった。

質問 8 a : 1989年の体制転換後、真相究明に向けて状況がどのように変化したか。

・カティン

パペシュさん：1943年の時点から事実分かっていた。1988年にクラクフで最初のカティン追悼石碑が置かれる。教会も沈黙を保たなかった。

パブウォフスカさん：公式にカティンの犯罪がソ連によって認められ、テレビ、ラジオ、新聞でも取り上げられるようになり、本も出版された。遺族会も設立され、カティンへ行けるようになった（ハルキフ、ミエドノイエの情報はまだない）。1989年8月にアダム・マツェドンスキ氏⁶が当時非合法ではあるがカティンへ赴く（最初の訪カティン）。

ブゾフスカさん：公の場で話せるようになった。1989年までは個人同士の会話でも慎重だったから。

・ミエドノイエ

クシャノフスカさん：大きな変化があった。カティンだけではなく、ハルキフ、ミエドノイエに関しても明らかになっていった。

ピアウエツカさん：50年間沈黙を保っていたカティンを口にできるようになった。1986年から遺族会の試みが始まった。自分たちは次世代に事件を伝えていかなければならないと悟った。

グジブさん：1989年になって遺族会が設立されてから、父に関する証明書、名前が載っているリストを得た。

・ハルキフ

シェカンスキさん：全てではないが、徐々に事実の解明を求めることができるようになった。1989年に遺族会も設立される。事件の詳細も明るみに出てきた。

ベウトフスカさん：1991年にエリツィン大統領が資料を公開したことで、家族はハルキフのことを知ることができた。未だに父親がいつ殺されたか、いつスタロピエルスク収容所を出たかなど分かって

⁶ アダム・マツェドンスキ (Adam Macedoński), 1931年ー, クラクフのカティン遺族会を立ち上げた者のうちの一人。

いない。リストで父がスタロビエルスク収容所にいたことが分かる。1940年に届いた手紙の送り先と場所が一致した。

ソリンスカさん：家族の願いにかかわらず、1990年以降になってスタロビエルスク収容所の捕虜たちも殺害されたということが分かる。

マルスカさん：1989年以降、カティン事件を口にできるようになった。遺族会に入った。

ポッドグルチクさん：1989年以降、全てを話すことができるようになった。1990年代に遺族会の委員になり、1991年8月10日にハルキフへ赴き埋葬式に出席した。

・ビコブニア

チェシエルスカさん：1989年以降に、シベリア抑留経験者会を設立した。ポーランド社会は、カティン、シベリア移送についてあまり知らず、あまり興味さえ示さないようになっている。1980年に連帯が出てきてから、徐々にカティン事件、シベリアについて話せるようになった。自分は1980年年代に大学にて講義をし、学生たちと議論し合った。1989年以降になって、遺族会が存在できるようになった。

・コジェルスク収容所から生還

シェグロフスカさん：最後の質問と合わせて。

質問8b：1989年の体制転換後、真相究明に向けて自ら何か行動を起こしたか。

・カティン

パベシュさん：1988年までは何もできなかった。連帯ができてから行動を起こすようになった。最初は死亡証明書の変更を求める。2006年には（Sejm：ポーランド共和国下院）とセナト（Senat：ポーランド共和国上院）に4月13日をカティン追悼の日にするよう文書を提出⁷。（すでにテレビ番組では2000年にこの日はカティンの日であると放送されていた。）

パブウォフスカさん：ヨーロッパ内の国際赤十字に文書を送るが、結果は得られず。ソ連は常に「その場所には誰もいなかった」と偽っていた。

ブゾフスカさん：家族が書類を紛失してしまったので、何もできなかった。

・ミエドノイエ

ククシャノフスカさん：1989年間では何もできなかった。夫の名前はミエドノイエのリストに載っていた。彼の弟の一緒にいたかもしれないが、未だに消息が分からない。

⁷ 2007年11月14日にセイムで、4月13日をカティンの森事件犠牲者追悼の日とする決議が可決されている。

ビアウエツカさん：2003年までクラクフのカティン遺族会に関する文献全ての出版に携わった。自分も文献を書いた。資料収集をすると共に、1995年になって初めてカティン事件の年表を作ることができた。

グジブさん：1957年に母が兄のいるイギリスへ行き、1970年代に帰国した。イギリスで得たカティンに関する資料をポーランドへ持ち帰ろうとしたが、兄に止められる。当時は荷物検査があり、資料が見つかり逮捕されることを案じたから。1989年以降、裁判所に訴えを起こしたが、裁判官は提出書類が不十分であるとの理由で、父の詳細を証明する文書の発行を拒否した。

・ハルキフ

シェカンスキさん：1980年代に2度ロンドンへ赴く。西側で出版されているカティン事件の文献を読むため。妻の家族がロンドンに住んでいる。

ベウトフスカさん：1989年まで国際赤十字に文書を出し続ける。1989年9月頃に合法ではないがカティンへ赴く(当時ハルキフはまだ発見されていない)。その旅行でオスタシュコフ収容所から生還した人と知り合い、彼から収容所の様子など情報を得ることができた。地下出版でユゼフ・チャプスキ⁸の本を読む機会があった。

ソリンスカさん：個人で何か行動を起こすのは難しいと思っていた。遺族会、カティン事件に関する組織が進めていってくれることを期待していた。

マルスカさん：1989年以降になって真相解明に向けて遺族会に入った。

ポッドグルチクさん：1989年以降、全てを話すことができるようになった。1990年代に遺族会の委員になり、1991年8月10日にハルキフへ赴き埋葬式に出席した。

・ビコブニア

チェシエルスカさん：文献を書き、資料を集めた。母親は死ぬまで、ほとんど何も語らなかった。

・コジェルスク収容所から生還

シェグロフスカさん：特に何もしていない。

⁸ ユゼフ・チャプスキ (Józef Czapski) (1896年4月3日 - 1993年1月12日) は、第二次世界大戦が始まるとすぐに動員され、その後ソ連軍の捕虜となりスタロビエルスク収容所へ送られた。そして奇跡的に虐殺から生き残った。1941年7月30日に調印されたソ連＝ポーランド協定による特赦で解放された後、再び軍隊に入り、ソ連軍によって移送されたポーランド軍将校たちの行方の捜索にあたっていた。戦後、パリに移り住む。
Czapski, Józef (チャプスキ, ユゼフ) [1962]. *Na nieludzkiej ziemi* (『非人間的な地で』), Paryż: Instytut Literacki.

質問9：遺族会の活動。

・カティン

パベシュさん：遺族会会員。遺族の人の声を集める。5年前から通い出した。

バブウォフスカさん：設立当時の遺族会会員。

ブゾフスカさん：カティン遺族会連盟 (Federacja Rodzin Katyńskich)⁹の会員でもある。

・ミエドノイエ

クシャノフスカさん：遺族会会員。

ピアウエツカさん：遺族会会員。設立当初の運営委員。

グジブさん：遺族会会員。シベリア抑留者の会の会員。

・ハルキフ

シェカンスキさん：ポーランド南部クラクフ、カティン遺族会会長。

ベウトフスカさん：遺族会運営委員。

ソリンスカさん：遺族会会員（ワルシャワ）。4年間ワルシャワのカティン博物館で勤務した。

マルスカさん：遺族会会員。

ポッドグルチクさん：遺族会秘書を務めた。

・ビコブニア

チュシェルスカさん：シベリア抑留者の会の副会長。カティン遺族会会員。

・コジェルスク収容所から生還

シェグロフスカさん：遺族会会員。

質問10：カティン事件に関して現在抱える問題。

・カティン

パベシュさん：ロシアはカティン事件を戦争犯罪だと認めるべき。ロシアが罪を認め、国際的な法廷で裁かれ、そして世界へ公表するべきだ。

バブウォフスカさん：ロシアは事件の資料を全て公表するべき、そしてカティン事件（国際刑事裁判

⁹ カティン遺族会連盟 (Federacja Rodzin Katyńskich), 1992年12月設立。本部はワルシャワ。国内各地の遺族会を統括している。

所規定による¹⁰⁾を「戦争犯罪に関する罪」¹¹⁾とされるべきだ。

ブゾフスカさん：カティン事件において、ポーランドとロシアとの関係の問題はまだ終わっていない。
ワルシャワのカティン博物館¹²⁾をもっと充実させるべきだ。

・ミエドノイエ

クシャノフスカさん：回答なし。最初の夫についてはあまり話せない。

グジブさん：ロシアはこれまでカティン事件を明らかにせず、自らの犯行さえも認めなかった。さらに現在もカティンをジェノサイドだと認めていない。

ビアウェツカさん：最後の質問と合わせて。

・ハルキフ

シェカンスキさん：現在まだ十分に明らかにされていない、西ウクライナのピコブニア、ベラルーシのミンスク付近のクロパティに埋葬されている約7500人の調査を早急にするべき。すでに発掘されている3つの現場（カティン、ミエドノイエ、ハルキフ）と同様の手段でポーランド人が殺害され埋められている。ピコブニアのリストはすでに入手しているが、クロパティの分はまだない。そしてその2ヶ所に墓地を早急に建設すべき。すなわち、まだ明らかにされていない場所も含み、虐殺における全真相の解明を要求する。現代のポーランド社会では、カティン事件がそれほど深く浸透していないので、歴史の風化を避けるために次世代に伝えていくことが必要だ。

ベウトフスカさん：ロシア側からの情報がなさすぎる。全資料の公開、殺害日等の具体的な情報が欲しい。カティン事件を「ジェノサイドに関する罪」¹³⁾と認定されるべき。

ソリンスカさん：事件の全真相解明。遺族会の中でも意見の食い違いが生じている。

マルスカさん：答えるのが難しいが、一番重要なことは事実を明らかにすること。ポーランド社会では賠償を求めるべきだと言われているが、私たちはそれを期待しているわけではない。

ポッドグルチクさん：ハルキフは今日ウクライナに位置しているが、ウクライナでも共産主義者が犯

¹⁰⁾ 国際刑事裁判所 (ICC: International Criminal Court) 国際社会における最も重大な犯罪に対する常設の国際司法機関。1998年7月に国際連合全権外交使節会議において採択された国際刑事裁判所ローマ規程 (ICC 規程) に基づき、2003年3月にオランダのハーグに設置される。ここで言う最も重大な犯罪とは、主に「集団殺害犯罪 (ジェノサイド罪)」、「人道に対する犯罪」、「戦争犯罪」である。

¹¹⁾ 「戦争犯罪」：他国に対して侵略戦争を仕掛けたり、敵兵・捕虜に対して非人道的な扱いをすること。また、民間人に対しての殺戮、追放、逮捕なども含まれる。

¹²⁾ ワルシャワの軍事博物館の中にカティン博物館が設置されている。Muzeum Katyńskie, ul. Powsińska 13, 02-090, Warszawa.

¹³⁾ 「集団殺害犯罪 (ジェノサイド罪)」：国民的、人種的、民族的または宗教的集団を、全部または一部は破壊する意図を持って行われる一定の行為。例：ナチスによるユダヤ人迫害、1990年の旧ユーゴスラビアにおける民族浄化製作の施行、ルワンダにおける部族間の虐殺。

罪を起こしたと人々が認識することが簡単ではなくなっている。人々は今まで、自らの考えを変えようとすることに恐怖感を抱いていた。今後の行方について、全てはロシア次第である。

・ビコブニア

チェシエルスカさん：最も重要なのは、事件を風化させず次世代へ伝えていくことである。賠償ではなく、ただ真実だけを知りたい。カティン事件、そして150万人ものポーランド人のソ連への移送に関する事実を明らかにし、資料を公開すべきである。

・コジェルスク収容所から生還

シェグロフスカさん：最後の質問と合わせて

質問11：ポーランド、ロシアに対する率直な気持ち。

・カティン

パペシュさん：ポーランド政府はカティン事件に関してまだ大した行動を起こしていない。一般のポーランド人とロシア人は和解していると思うが、ロシア政府はポーランドに嫌悪感を表している。しかし、アンジェイ・ワイダ監督の映画『カティンの森』を見ると、ロシア人はたまにはポーランド人を助け、礼儀正しい態度を取っている。

パブウォフスカさん：現在ポーランドはロシアに恐怖心を抱いている。ロシアは資料の一部を公開したが、今では再び打ち切っており、未だ全ての資料を公開しようとはしない。ポーランドの地理的な立場、つまりヨーロッパでの政治的、地理的な状況において、ポーランドとロシアの関係は良好であるべきだ。ポーランドには18世紀以来、歴史的背景におけるロシアへの偏見がある。

ブゾフスカさん：ポーランドは絶えずロシアより弱い立場に立たされている。2国間における歴史的事実の確立は必須だ。隣国関係において、他の問題に関しても、ポーランドはいつも弱い。国境を接する国同士では従属における問題がいつも生じている。

・ミエドノイエ

クシャノフスカさん：ロシアに対して、特にボルシェビキへの嫌悪感がある。以下、息子ヘンリク・クシャノフスキさんの意見：現在、ポーランドはあまり行動を起こしていない。なぜなら自ら行動を起こすことに対して恐怖心があるからだ。ロシアは民主主義に欠けている。現在、ポーランドとロシアはオープンに話し合いができる状態ではない。ロシアはいつも真実を言わない。

グジブさん：一般のロシア人は貧しい。自分は今現在もロシア人を恐れている。いつもロシアは国家体制に脅かされており、未だにロシア社会は貧困状態だ。自分はポーランドが共産主義から解放され、自由な国になって嬉しい。

ピアウェツカさん：ポーランド社会は、ゴルバチョフ大統領とエリツィン大統領の表明に敬意を表し高く評価した。さらに、虐殺に関わった当時の人々の名前の一部や機関を公表したことに対しても評価している。カティン事件は、未だ道徳的にも法的にも清算されていないことを残念に感じる。唯一の試みとして、ニュルンベルグ裁判の場があったが、何の解決にも至らなかった。これはソ連の過ちだけではなく、連合国の過ちでもあったと言える。私そして私の同胞は、決してロシアに抑留された同胞たちのことを忘れるはしない。ポーランド人はカティンで虐殺されただけではなく、カザフスタン、ウズベキスタン、シベリアや他の地でも命を落としている。未だにその跡がないところもある。西ヨーロッパやアメリカの人々はこのことを知らない。人は、カティン事件は他の事件と同様に国家のテロリズムの犯罪だと言うことができる。どの国家も自国の歴史から目を逸らしてはならず、偽りによって自国の伝統を築いてはならない。だから、絶えず帝国主義の視点から統治しているロシアは、今後においてもスターリン主義の視点を賢く排除していくだろう。ポーランド人は第二次世界大戦での闘いにおいてソ連軍の勇敢さを正しく評価しないというわけではない。ロシアはカティンという犯罪や事実の解明に向けて道徳的な評価を下し、それを認めるべきだと思う。世界は本当の共産主義の犯罪の歴史を知るべきである。ポーランド人は、その共産主義の犯罪の公式な全事実解明を期待する権利があり、それを待ち望んでいる。また、その犠牲者の家族にも道徳的な権利がある。ここからポーランドに対して、ポーランド人捕虜や犠牲者の個人情報に関する文書を求めるのである。ポーランド人には、この事件をストラスブールの国際裁判¹⁴で告発する権利があるのだ。ロシア人、かつてのソ連人は、今は打ち切っているが、カティン事件解明の終結に向けてポーランド人と共に努力していくべきだ。カティンはただの戦争犯罪ではなく、人道そしてジェノサイドに対する犯罪という世界の意見も得ている。ポーランドとロシア、2国間の友好関係を可能にするための道を探す必要がある。公正さにおける許しや対話での必要条件を忘れてはならない。自分にとってカティン事件は、いつも良心に関わる問題として心に残っている。ペシュコフスキ神父¹⁵は次のように述べている。「カティンの真実は全人類の中にある。」自分は、遺族会がソ連の抑圧に対する犠牲者における史実調査、その史実を広めようとしていることを高く評価する。

・ハルキフ

シェカンスキさん：ポーランドはロシアとの関係を改善していくべきだ。ロシアは最後まで事実の解明をするべきである。そして、犠牲者の追悼を続けていく。

¹⁴ 欧州人権裁判所 (European Court of Human Right) : 1959年にフランスのストラスブールに設置される。対象は欧州評議会加盟国である。国家間の紛争を扱う国際連合の国際司法裁判所とは異なり、国家対国家だけではなく、個人や団体の国家に対する提訴も受け付けている。

¹⁵ ズジスワフ・ペシュコフスキ神父 (ks. Zdzisław Peszkowski), 1918年8月23日生 - 2007年10月7日。1939年10月からコジェルスク収容所で過ごし、虐殺を免れ奇跡的に生還した。

ベウトフスカさん：ポーランド人は、発掘作業、3か所の墓地の建設など今までたくさんのことをしてきた。ロシアは何もしていない。全く無実の者たちに（ドイツ）に罪を被せるのは然るべき事でない。スターリンはたくさんロシア人を殺害したが、ポーランド人犠牲者の方が少ないというロシアの議論は道徳的ではない。一度、ロシアは犯行を認めたが、今ではカティン事件は戦争で起きたことであり、もう過ぎたことだと述べているのが理解し難い。国際裁判に持ち込みたい。

ソリンスカさん：カティン事件を二国間の対立に持ち込むには、ロシアは強大すぎる。ポーランドは真相解明に向けて行動もできない。戦争、占領はもうたくさんだ。今後も追悼を続けていくべきだ。ポーランド国内では、国の権力者同士で対立が起きているため、カティン事件に関しては何の進展もない。遺族会はいずれ国際裁判へ持ち込もうとしている。自分はロシアに友好を示すことができない。なぜならロシアはカティン事件をもう過ぎてしまったことと述べているからだ。

マルスカさん：墓地へ行けるようになったのはよかったが、事実が全て明らかにされていない以上、カティン事件はまだ終わっていない。ロシアはポーランドの政治に意見をし、いつも反発してくるところに恐怖を感じる。

ポッドグルチクさん：共産主義体制崩壊後の体制の中でもロシア社会は貧しく思える。ポーランドとロシアは絶えず隣国同士で、良い関係を築いていくべきだ。

・ビコブニア

チェシエルスカさん：共産主義時代にソ連国民だけではなく、他民族に対しても抑圧をしていたという事実を、ソ連、ロシア、そしてロシア人はその歴史認識の共有をするべきだ。ポーランドにとってロシアはいつも脅威である。現在もロシアは、とりわけポーランドとの関係において、ソ連の抑圧に関する証拠資料を未だ隠している。私たちの国の関係が変わらない限り、良い方向へ進むことができないだろう。共産主義が崩壊しただけでは十分でないのは事実である。ソ連やポーランド人民共和国による犯罪へ対する判決や非難がないからである。シベリア、カザフスタンにいたロシア人は移送されてきたポーランド人に手助けをしていた。良い人々であると同時に貧しい人々である。しかしながら彼らには、歴史の捏造や共産主義下での教育のせいで、歴史的な知識は欠けている。自分は共産主義が崩壊して嬉しいが、まだその非人道的な体制に対する清算はなされていない。いつかまたこの体制に戻るのではないかと恐れている。

・コジェルスク収容所から生還

シェグロフスカさん：ポーランド人家族だけではなくロシア人家族への賠償の問題等から、ロシア政府は許さなかったが、ロシア人はかつて墓地を建設した。これから先50年後にはカティンの文書は全部公開されるだろうと予想している。まだ調査が完全に終わっていないウクライナやベラルーシの現場も調査され、より多くのことが知られるようになるだろうと考えている。連合国は、ポーランド亡

命政府から1943年4月13日以前にポーランド人将校はもう生きてはいないと知っていた。カティンはロシア人にとっても重要であるべき。なぜなら、彼らにもスターリンによる犯罪があり、それを明らかにしていかなければならないから。1970年代に夫が客員教示としてドゥブナ（Dubna：モスクワ州の都市）へ招かれる。そこで、ロシア人や西側諸国の人々と交流を持った。自分の意見としては、ロシア人が全員悪いわけではなく、カティン事件はNKVDの犯行である。ロシア人と交流を持ち始めてからこう思うようになった。そして、ロシアは未だに消息の分からないポーランド人の搜索をするべきだ。

4. インタビューを終えて

本インタビューは、虐殺の正確な記録を追い求めるのではなく、遺族の声を直に聞くことで時代に翻弄された遺族の意識を外国人の視点から分析していくことが目的であった。インタビューでは、率直な遺族の声を聞くことができた。筆者の設問に対して特に口が重いというわけではなく、事実や心情を率直に語ってもらえたと思う。あと十数年もすれば、現在遺族会で活動している子ども世代の遺族がほとんどいなくなる。したがって、今回のインタビューで遺族の肉声が聞けたことは幸いであった。

このインタビューを通じて、遺族は共産主義時代は事件を口にすることができず、事件関係者であることから共産党当局から何らかの抑圧を受けてきたことが明らかになった。一方、体制転換後は自由になり遺族の真相解明に対する期待が高まった様子が確認できた。また、遺族たちは賠償や謝罪が欲しいわけではなく、ただ真実を知りたい、そしてロシアが罪を認めることを願っているという様子も浮き彫りになった。

先に述べたとおり、このインタビューの詳しい分析は別稿で行っている。拙稿では、遺族がどう生きてきたかを見ることによって、戦争中、共産主義時代、体制転換後という大きな時代の変化の中で、事件が一般の生活や当時の政治の中でどのように扱われてきたのかを浮かび上がらせている。

今後は、これらの分析をもとに、対立する歴史認識をどのようにすりあわせていくべきか、またそのことが隣国間の国際関係構築にどのような役割を果たしていくのかなどを考えていきたい。